

～洛西からの一読～

今回のテーマは「日本のミステリー」

小説の人気ジャンルの一つであるミステリー。明治時代から昭和20年代初めにかけて、日本では探偵小説と呼ばれていました。コナン・ドイル、アガサ・クリスティ、江戸川乱歩などを思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか？今回は日本のミステリーに関する本を紹介します。

開化の殺人 大正文豪ミステリ事始

中央公論新社／編 江戸川 乱歩／[ほか著] 中央公論新社



大正7年7月、「我国最初の計画 芸術的探偵小説」と予告され発行された雑誌がありました。『中央公論 臨時増刊 秘密と開放号』です。本書には、この雑誌に掲載された芥川龍之介の「開化の殺人」や佐藤春夫の「指紋」のほか、昭和22年に発表された江戸川乱歩のエッセイ「探偵小説と一般文壇」も収録されています。

中央公論に掲載された小説や戯曲は、「秘密」がテーマになっており、乱歩が文壇デビューする前に書かれた探偵小説です。読み進めるにつれ真相が明らかになっていくところに恐怖や緊張感を味わえます。そして「我国最初」とうたわれた作品の世界にひたることができます。

また、乱歩のエッセイでは、探偵小説のあゆみが簡単に説明されているほか、坂口安吾や織田作之助など、お馴染みの文豪たちが、乱歩に探偵小説を書いてみたい旨を伝えていたことが分かります。探偵小説を通してジャンルの異なる作家たちがつながっていたことも興味深いです。

皆さんはどの作品の秘密からのぞいてみますか？ドキドキしながらページをめくってみてください。

日本ミステリー小説史 黒岩涙香から松本清張へ

堀 啓子／著 中央公論新社



日本でミステリーがどのように浸透してきたのか、詳しく分かる一冊です。外国から入ってきたミステリーが翻訳され始めたのは明治時代からでした。明治20年代初めに、黒岩涙香が新聞の連載小説にミステリーの翻訳を載せ始めたのが、最初の探偵小説ブームの火付け役となります。しかし当時は、ミステリーが小説の一ジャンルとして確立したわけではありませんでした。涙香が書いた、日本初の

創作探偵小説と言われる『無惨』も、「論理的すぎる」という理由で読者には受け入れられませんでした。また、怪異や恐怖を誇張した安易な作品も多く、文壇での評価も得られませんでした。

今では人気のミステリーですが、ジャンルとして確立するまでには様々な困難がありました。その時の文化や情勢、時には偶然によって形を変えてきたミステリーの歴史を味わえます。